慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : ガッサン・ ハージ著 (塩原良和・ 川端浩平・ 前川真祐子・ 稲津秀樹・ 高橋進之介訳) 『オルター・ ポリティクス : 批判的人類学とラディカルな想像力』明石書店、2022年
Sub Title	
Author	宮下, 大輝(Miyashita, Taiki) 閻, 書普(Yan, Shupu)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.107- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

ガッサン・ハージ著（塩原良和・川端浩平・前川真祐子・稲津秀樹・高橋進之介訳）
『オルター・ポリティクス――批判的人類学とラディカルな想像力』

明石書店、2022年

宮下　大輝・閻　書普

原著は2015年にMelbourne University Pressより刊行されたAlter-Politics: Critical Anthropology and the Radical Imaginationである。オーストラリアの人類学者ガッサン・ハージ（メルボルン大学教授）は、自身もレバノン移民のルーツをもつ知識人として、これまでにナショナリズム、レイシズム、多文化主義、ポストコロニアリズムなどに関する論評、あるいはディアスポラを生きる人々を対象とした民族誌的研究にもとづく著作を残してきた。単著としては5作目にあたる本書でハージは、すでに邦訳されている『ホワイト・ネイション』や『希望の分配メカニズム』でも見られるグローバルに広がる権力関係に伴う見えざる暴力の諸形態といった問題意識を受け継ぎながらも、新たに批判的人類学の見地に着想を得た「別のあり方を模索する政治（オルター・ポリティクス）」の視点を鍵概念として提起する。それは敵と味方の峻別を促す「抵抗の政治（アンチ・ポリティクス）」を補完する考え方であり、今日ますます強化される他者性を否認する傾向に抗いながら、関係性の新たな地平を切り開くための探求である（この点については後述したい）。

内容として、2005年から2013年の間に複数の学術誌や学会の基調講演、はたまた著者のフェイスブックなど実に様々な場面で発表されてきた、11の論考が収録されており、序章に続いて、4つのパートに編纂されている。また、今回の邦訳版ではハージによる「日本語版への序文」や、中東地域を専門とする文化人類学者の齋藤剛氏による「解説」、さらに5名の訳者による座談会をベースに編まれた「あとがき」も読後の理解を助けてくれる。以下ではまず、各部の要約を整理したい。

第Ⅰ部は2つの章から構成される。まず第1章「後期入植者状況のグローバル化」では、ある特徴的な社会編成において、支配的権力をもつ者がそうでない者に対していかに暴力を行使しうるかについて議論がなされる。ハージは、かつてレバノン人キリスト教徒やイスラエルのシオニストに見られた類似する文化的エートスが、今日グローバルな広がりを見せていると指摘する。それは、自らが優越的であるとみなす価値が衰退する原因を、異質な他者によってあたかも「包囲されている」かのような構図に求める、被害妄想的かつ権威主義的な感覚である。第2章「『ドツボにはまる』ことについて」では危機の経験による実存的な行き詰まりの感覚が蔓延することがもたらす、閉塞的な帰結が描かれる。今日様々な局面で見られる「英雄的な忍耐」への称揚が示すのは、危機の経験がもはや社会変化の道を開くものではなく、むしろその状況を批評する営みを「恒常的な袋小路」に陥らせるような現状である。こうした状況においては、従来的な「反対する（アンチ）」の思考に、「別の道を探る（オルター）」の

宮下大輝・閻書普「ガッサン・ハージ著（塩原良和・川端浩平・前川真祐子・稲津秀樹・高橋進之介訳）『オルター・ポリティクス――批判的人類学とラディカルな想像力』」『三田社会学』第28号（2023年7月）　107–110頁

思考を共存させることで危機に対峙していくあり方が求められるとハージは主張する。

第Ⅱ部では、別のあり方を模索する政治を構想するうえで、批判的人類学の見地がいかに貢献するかについて考察される。第3章「批判的人類学の思考とラディカルな政治的想像界の現在」では、批判的社会学・歴史学・精神分析などを引き合いに出しながら、存在論的転回、換言すれば「私たちがいまそうであるものではない、別のものでありうる可能性」を探究する人類学における批判的思考のあり方を再評価することの意義を示している。その上で、第4章「アラブの社会科学と批判をめぐるふたつの伝統」でハージは批判的な社会科学の再解釈を試みる。そこでは、他者の現実を探求する社会科学が内包しうる、ともすれば一方的に他者を把握しようとする統治的なあり方をいかにして見直すことができるかについて考察がなされている。

つづく第Ⅲ部では、「政治的な感情と情熱」がもたらす可能性について検討される。第5章「民族誌と政治的な感情について」で展開されるのは、ハージ自身の自己の帰属をめぐる自叙的な民族誌的記述である。調査地で抱いたイスラエルに対する憎しみや怒りの性質を分析することを通じて見えてくるのは、特定の政治的な感情を観察対象とする過程で生じる「民族誌的揺らぎ」、すなわち、自らの文化的世界と観察する調査協力者たちの文化の間に生じる「存在のあり方」であり、民族誌研究者にとっては、その揺らぎそのものを認識し批判的に内省する能力が重要であると指摘する。また、第6章「オルター・ポリティカルな理性とアンチ・ポリティカルな感情」では、ネグリとハートによるフランツ・ファノンに関する議論を取り上げ、別のあり方を模索する政治を知的／戦略的なものとして論じることの限界性を指摘している。ハージの意図は、反レイシズムがめざす普遍主義や「新しい人間性」の模索に依然として見られる「否定」への欲求を乗り越え、「共に生きることができる」空間を創出するための視座を提供することにある。

5つの章から成る第Ⅳ部は、前段までの論点をより具体的な事例のなかに位置づけるとともに、本書の目的を達成するための新たな概念枠組みを導き出す試みがなされている。第7章「自己陶酔的な被害者意識について」は、パレスチナ問題について公の場で語ることの困難さについての体験談から幕を開ける。ハージは、自らを抑圧され力を奪われる「被害者」であるみなす「自己陶酔的なナショナリズム」が、他者と共に在ることへの願望を喪失させるものであるとして警鐘を鳴らす。ここで強調されるのは、悪い関係性をいかにして良い関係性に変えることができるのか、という関係論的な思考の重要性である。第8章「占領されざるもの」では、イスラエルによる暴力にさらされる「占領された」パレスチナ人を事例に、「抵抗」に満ちた空間においてふつうの生を営むことがいかに可能になるのかについて、相反する「レジリエンス」という概念を通して考察されている。第9章「反レイシズムをリコールする」においても、相互性や互酬性といった観点を手掛かりにした関係性の捉え直しが試行されている。そこでは反レイシズムについて、従来「『合理主義的な』存在様態」に固執してきたという点、あるいはレイシズムや人種化された人々を「分析的な飼いならしの対象」として認識してしまう点を自省しながら、自己の主体／他者の客体といった関係性を絶対視することなく、両者が溶解するような水準に立って議論することが求められる。そして第10章「ユートピア的思想という現実に住まうこと」では、特にあらゆる場面において見えざる現実に目を向けること、すなわち「現実の複数性」を認識することの重要性が強調される。これはすなわち、単一現実主義を克服することであり、それにより現存する現実に他者性を迎え入れ、ユートピアを現実的にと

らえることが可能になる。そして、第11章「もうひとつの帰属のあり方」では、「移動」する人間にとっての根源的な喜びに関わる、「根付くこと（ルーテッドネス）」によって経験される「共に在る」感覚がもたらす駆動力、およびそれがもたらす自省と他者の受容とが交差する側面を指摘するとともに、排他的な二者択一の論理で説明される権力関係から抜け出すための「帰属のあり方」を提起し、本書を結論付けている。

以下では、紙幅の許すかぎり評者らのコメントを記したい。前作のあとがきでも言及されている点であるが、ハージの著作には特定の地域を越えた社会のあり方を分析しうる、魅力的な概念枠組みが多数登場する（塩原 2008: 272）。上記の要約を一読しただけでも、本書においても「ハージ節」がいかんなく発揮されていることが感じられるだろう。そうした言葉たちを「魅力的」たらしめているのは、たとえば「ドツボにはまる（stuckedness）」がそうであるように、それらが人々の日常的な経験や感覚に根ざした表現を通じて創出されていることではないだろうか。移民もレイシストも、誰もが等しく経験しうる実存的な行き詰まりを表す同概念が伝えているのは、「あいつ（ら）はけしからんのだ」と一言で相手の価値を貶めるような「アンチ」のあり方ではなく、同じ時代を航海しながらグローバルな荒波に共に苛まれ、共にもがき進もうとしている状況にあるのだという感覚を喚起し、一見対立するかに見える人々が共有可能な視点を提示することで、関係性の「オルター」なあり方を想像する機会を与えてくれている。考えてみれば今日の日本社会においても、たとえば「民度が低い人」や「非国民」など、理解しがたい他者を晒しあげるようにして、関係性を二項対立に固定化する方向に仕向けるような表現が目に留まる。そうした俗語をハージに倣って真剣（シリアスリー）に分析してみることは、本書でいう単一現実主義への批判を促し、複数の現実（リアリティーズ）を発見する契機となるかもしれない。

このように、安易な二項対立に還元することへの批判は明らかに本書の強調点であるが、以下ではこの動きをよりナショナルな文脈から考えてみたい。たとえば本書前半に登場した「男根民主主義」は、イデオロギーが「文明化」の度合いという尺度をもってあたかも「武器」のように利用される状況を示す概念であったが、こうした虚無化の背景には民主主義のスタンダード自体が西洋中心的に構築されてきたという歴史的経緯が存在する。また、国際移動が活発化し、様々な文脈で異なる他者に接触することがますます常態化している今日、二項対立的な考え方は自分と異なる他者に対する不信感を助長し、他者の存在や異なる自分の存在のあり方への想像力を喪失させると考えられる。たとえば日本社会では「国籍」や「血統」によって、外国人／日本人、あるいはゲスト／ホストという峻別された認識が依然として自明視されている。移民研究では、国際移住後も常に漂泊しているような感覚を抱き、真の家は母国にある「外来者」として自己認識する「ソジョナー」（Siu 1988）という概念が広く知られているが、このことは長期滞在者や定住の意思をもつ者に対して、移住先／母国という二分法に基づいた認識をあてはめて考えてきたことの結果であると捉えられるかもしれない。

なお、ハージは近年の著作において、本書後半で展開された「複数の現実（リアリティーズ）」や「帰属のあり方」に関する考察をさらに精緻化させているようだ。レバノンの山村からオーストラリアやカナダ、アメリカの都市を結ぶディアスポラの文化を描いた著作（Hage 2021）では、「レンチキュラーな現実（Lenticular realities）」あるいは「複数の場所に住み続けること（multiple inhabitance）」といった概念が提示され、ディアスポラを生きる人々が生涯を通して獲得する多様な現実が作用することによって、彼・彼女らの内的世界がいかに揺れ動き続けているのかについて検証されている。しかしここで

留意したいのは、ハージはそれをレバノン人ディアスポラに生きる人々固有の特徴であるとは理解しないということだ。重要なのは、単に「文化の違い」として収斂されることのない複数の現実（リアリティーズ）の存在である。いかなる立場であれ、私たちは社会的に構成された現実（リアリティーズ）にさらされ、それらと交渉しながら固定されることのない生を経験しうる。それは多様な他者性が混淆する世界を生きる私たちが、絶えず自己変容の機会に開かれていることを示唆しているのであり、そのことこそが、「否認」するのではなく「関係」から考える、という本書が投げかける共生のための希望的地平であると言えるだろう。

【文献】

Hage, Ghassan, 2021, *The Diasporic Condition: Ethnographic Explorations of Lebanese in the World*, Chicago: The University of Chicago Press.

塩原良和，2008,「訳者あとがき」ガッサン・ハージ『希望の分配メカニズム――パラノイア・ナショナリズム批判』塩原良和訳，お茶の水書房，269-274.

Siu, Paul C.P., 1988, *The Chinese Laundryman: A Study of Social Isolation*, New York: New York University Press.

（みやした　たいき　慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程）
（えん　しょふ　慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程）